

温州ミカン高接樹における接木部の胴枯症状について

野口保弘・田中澄人(福岡県園芸試験場)

NOGUCHI, Y. and S. TANAKA: Occurrence of Trunk Disease on Top Grafted Satsuma Mandarin

1980年、福岡県八女郡広川町のカンキッ園で、約8 haの高接面積中約50 aにおいて温州ミカンの中間台に興津21号など高接したところ、胴枯症状が現われ、穂木が枯死した。この症状は、農林水産省林業試験場樹病研究室小林享夫室長並びに林弘子主任研究官によって絹皮病と診断された。カンキッは絹皮病の発生は報告がないように思われるので、概要を報告する。本症状の診断にあられた小林享夫、林弘子両氏に深謝する。

発生状況 1980年4月中旬に高接ぎしたところ、5月には第1表のような発生状況がみられた。

第1表 胴枯症状の発生状況

園別	高接本数	中間台の品種	穂木の種類	樹令	高接樹の被害状況
A	30	林温州	興津21号(一部伊予柑)	12年生	80~90%に発生
B	100	"	宮内伊予柑	11~12	約80%に発生
C	200	"	伊予柑と興津21号		10~15%に発生

病徴 温州ミカンの中間台に興津21号、伊予柑、宮内伊予柑を高接ぎしたところ、5~6日後には高接ぎ部分のビニールテープの下に白色菌糸そうが一面に覆い、樹幹にはヤニが発生して後胴枯症状になり、穂木は活着せず枯死した。

接種試験など 樹幹の病患部から常法によって分離した菌を、場内の温州ミカンに接種した。接種2週間後には、樹皮表面上に白色菌糸そうが繁殖し、表皮の褐変がみられた。また、樹幹の病患部から2cm角の切片をとり、温州ミカンの主枝に有傷接種を行ったところ、接種部に白色菌糸を生じ、後胴枯症状となった。分離菌の発育温度を調べるため、病菌そうをPDA培地上におき、2日後に菌そうの直径を測った。その結果、発育最適温度は約30℃と認められた。

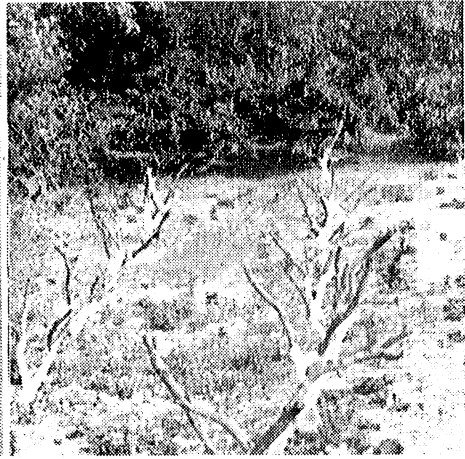


写真1 左：接木部に発生した菌糸そう 右：胴枯症状の発生現場の状況